大阪市立大学『人権問題研究』1号,2001,pp.185～195　ISSN 1346－454X

実践的立場から見た戦後教育の総括(4):「荒れる」子どもたちの実態(その2)

木下健二※

1、はじめに

かつて、被差別の側に置かれた子どもたちが、きびしい差別に直面し、教育からも集団からも疎外されて、自らの生きるよすがを追い求める必死の姿があった。しかしそれは、「荒れる」ことでしか表現できない姿として浮上していた。――「かつて」という過去形で書いたけれど、この実態は、現在においても同様である。

この子どもたちの実態は、大人の眼から見れば「非行」という言葉で簡単に片付けてしまいがちであるが、子どもたちにしてみれば、被差別の現実から抜け出したい必死のもだえであり、差別教育・差別社会に対する精一杯の抗議・抵抗である。

ただ残念ながら、それらの子どもたちは、自らの思いを「反社会的な行動」でしか表わすことができないのである。この表面的な部分だけをとらえて、「悪いヤツ」というレッテルを貼ることしかしない大人の感性が、子どもたちの「荒れ」にますます拍車をかける結果を招いてしまうのである。

シンナーや煙草・暴力にあけくれるある子どもが、「先生、おれ、もう突っぱんのやめるわ。なんぼ突っぱっても、『つけ』はみんなおれに返ってくるもんな…!!」と寂しく笑って、まっとうな生き方をさぐり求めながら、翌日もやっぱり同じ姿で荒れていく。

また、家庭での両親のゆがみの中で、じっと堪えながら生き続けてきた子どもが、あるときから突然変わりはじめる。「あんなにやさしかったヤツが…!!」「あんなにまじめだったヤツが…!!」といって、親も教師も唖然とする。しかしそのときには、子どもは、もう大人や教師が頼りにならないことを、そして、自分の思いなど何ひとつわかってくれないことを知りきっているのである。だから、大人の言う「説教」などに耳をかそうとはしないのである。

末期的な状況にまで子どもを追い込んでおきながら、そのことに気づこうとしないで、どれほど教師面(大人面)をして子どもに語りかけようが、子どもはすでにそんな教師(大人)との絆を自らの中で断ち切っているのである。

こんな子どもたちを、教育の対局に立たせてはならない。教育(学校・家庭・地域社会すべてを含めて)は、そこに行きつくまでの子どもの生活に眼を向け、子どもの思いに耳を傾ける、いうならば極めて面倒な営みなのである。この面倒な営みの中に、教育の喜びがあり子どもと教師(大人)の絆ができあがる。

荒れる子どもたちの真実の叫びをたしかにうけとめて、その中から、やさしさを求め、人間性を確かめる教育の中身を創らねばならない。それが、右翼化し反動化する教育をまっこうから見つめ、はねかえす力になるのである。

本稿では、1980年から81年にかけての、被差別部落の少年利男(仮名)と父親の生活実態や思いに視点をあてながら、利男の「荒れ」から「立ち直り」までの親子の姿を記してみたい。――この内容は、1989年に出版した拙著「『荒れ』が告発するもの」に記述したものである。若干の加筆・修正を加えて掲載する。

2、少年利男の生活実態と思い

苛酷な差別の中で、教育を奪われ、基本的な生活の保障も何もないまま、毎日の生活にあえぐ被差別部落の親の姿があった。

若い頃の仕事の無理がたたって身体をこわし、それ以後は定職もなく貧しさの中に落ち込んでいく父の姿とそのために崩れていく子どもの姿は、部落差別の典型だった。

少年利男は、幼児の頃に自分を捨てた母のイメージをひそかに追い求め、母への思慕と同時に、怒り・憎しみを複雑にからませながら、自分のやりきれなさを誰に言うこともなく、自らの閉ざした生活のなかに背負ったままで崩れていった。その利男の姿を通して、私たち教師は、差別の厳しさを思い知らされたのである。

我が子の行動に時には激怒し、時には子育てを放棄するところまで追い込まれ、大人の価値観でしか子どもをとらえられなかった父親と、そんな父親を心の片隅で憤りながら、父の立ち直りを必死で告発し続ける少年利男の姿は痛ましかった。しかしその告発は、「非行」という形でしか表せなかった。

部落の親と子の生活そのものが崩れていく。それはまさに、差別のなかで基本的な生活が保障されず、そのために無理をして身体をこわしてしまう父親。その結果が、子どもを「非行」においやっていった無残な姿である。

こんな父と子の屈折した生活が続く。しかし、この少年利男を立ち直らせたのは、誰でもない結局父親だった。

自らの被差別の生きざまを我が子に語り、これまでの自分のいいかげんさを我が子にわびるなかで、まっとうに生きようとする親と子の姿。それはまさに、差別に抗う父子の精一杯の姿であった。

3、利男が育ってきた環境

利男の家庭は、父ひとり子ひとりのいわゆる父子家庭である。父は学歴としては小学校卒業ではあるが、満足に行っていないため、漢字の読み書きはほとんどできない。小学校卒業後は、炭坑労働や靴直し・行商・鉄工所等いろんな職業を転々としていたが、不安定な仕事ばかりで長続きせず、収入も安定しなかった。その上、19歳のとき仕事の無理がたたって肺結核にかかったが、貧乏と仕事に追われ、通院すら満足にできず治癒しないままの生活であった。

母は、利男が生まれて間もなく父が仕事で怪我をして入院したため、結婚式場の調理場へパートで働きに出た。ところがそのうち板前の男性と親しくなり、利男がちょうど1歳半の頃、その男性と家出をしてしまった。当然父と母は離婚。利男はT市の伯母(父の姉)夫婦の許へあずけられそこで育った。

利男が幼稚園のころに、父は麻雀屋で知り合った女性と再婚。T市から利男を引き取って新しい生活を始めたが、義母がなにかにつけて利男をいじめたことや、地域のなかでもいろいろ問題を起こしたことなどで離婚。利男は再びT市へあずけられた。(この女性には利男と同年の連れ子があり、後でわかったことだが前夫と法的に切れていなかったために、めんどうなトラブル等で父はさんざんなめにあっている。)

1973年(昭48)6月、父は、当時小学校1年生であった利男をT市から引き取って、父子2人の生活をはじめたが、病気がちのため定職がなく、1976年(昭51)9月から再び生活保護を受けるようになった。(1969.4.1～1973.6.1まで生活保護受給、この後いったん打ち切り。)

父は定職がないため、朝10時ごろからぶらっと家を出て、パチンコや魚釣りなどで気分をまぎらわす毎日が続いた。麻雀屋にもアルバイトとしてしばらくつとめていたが、利男が中学2年生の4月にやめてい

る。

夜も帰宅はおそく、10時を過ぎても父はまだ帰っていなかった。教師が家庭訪問をしても、父にはなかなか会えないのが当時の状況であった。もちろん家には電話もなかった。食事も父子別々に外食で、親と子は食卓をかこんで夕食をいっしょに食べるようなことは、ほとんどこの家庭にはなかった。

利男の部屋は、机とテレビと古びた整理ダンスが置いてあり、ふとんは敷きっぱなしで、足の踏み場もないほど乱雑に散らかっていた。炊事場もほとんど使った後は見られなかった。

表の六畳の部屋は、洋服ダンスと整理ダンスが置かれていたが、中はほとんどからである。父親のふとんもたいてい敷いたままである。壁には、父の母親（利男の祖母）の写真と、神戸で自ら生命を絶ったという芸者姿の姉の写真がかけてあった。

4、母への絶望と父への不信

利男はこのような家庭環境で育つうちに、小学校3年生の頃から「盗み」をおぼえた。友だち数人とAストアーで牛乳を盗んだのが最初である。5年生当時も、先生の所持金をバッグから何回かにわたって盗んでいる。

住之江中学校に入って、1年生の後半から2年生の1学期にかけて、この状況はもっとひどかった。車上盗・店舗での窃盗・ゲーム機荒らし等、盗んだ金額はかなりの額に達していた。

幼児期に家を捨てた実母のことは、利男の記憶にはまったくない。父が再婚したころは、まだ、新しい母に対する甘えのようなものは持っていたが、T市の伯母を母親と思って慕ってきた利男には、新しい義母にすぐなつくことはできなかったし、その上、義母にいじめられたこともあって、利男のなかにある母親へのイメージは、完全にかたくななものになったようである。

自分を捨てた実母と、自分をいじめた義母。そこには、母への「暗い絶望」しかなかった。それから以後は、「おかあちゃんは、いらん」と言い続けてきた利男である。

幼児期から育ててくれたT市の伯母にはよくなつき、春・夏・冬の長期休暇には、かならずT市へ行き、伯母のもとで生活を楽しんできた。家庭では、父が夜おそくまで帰らなかったため、親と子の対話もほとんどなかった。

利男は学校が終わるとまっすぐ帰宅し、数少ない友だちとぶらぶらするか家でテレビを見ているかであった。自分を閉ざしてしか生きてゆけない利男は、何かにつけて消極的で無口な部分だけが浮上し、友だちも少なく、したがって地域の住宅のなかでも、近所の大人や同年代の子どもたちと親しく話したり遊んだりすることは、ほとんどなかった。窃盗などで警察や被害を受けた当事者などから父親に連絡があると、父は利男をなぐりつける。「今までどんな思いをしておまえを育ててきたか」ということを、かなり愚痴っぽくくり返して叱る。しかし利男にとっては、父親から叱られるたびに、いつもぶらぶらしている父への不信だけがつのっていくようであった。

利男は、父が病気がちであることも知っていたし、仕事がないことも知っていた。しかし、何本かの釣竿をもって海に出かける父の姿、麻雀屋のアルバイトではあっても、夜おそくまで麻雀をしている父の姿、パチンコをしている父の姿、そして、自分が盗みをやったときに叱りつける父の姿、こんな父の姿は、利男にとっては「信頼できるオヤジ」ではなかった。

父と子の対話もなく、学校から帰っても誰もいない家のなかで、日が暮れても電灯もつけず、ただ一人でテレビを見るしかない毎日の生活は、利男にとってはたえられなかったのである。教師が家に行っても、利男の表情には何の変化もなかった。「夕めしは食ったのか?」と聞いても、ただ「うん」という返事が返ってくるだけである。「お父ちゃんは何時ごろ帰ってくる?」と聞いても、「知らん」という言葉だけである。時々一生懸命本をみている利男の姿に出会う。もち

ろんその本は漫画である。

誰と話すでもなく、父が遅く帰ってきても「お帰り」とも言わず、ちらっと父の姿を見るだけである。父もまた利男に声もかけず、表の六畳間にこもって、自動販売機で買ってきた酒を飲んで寝てしまうのである。

そんな空虚さの中に身を置きながら、利男は盗みをくり返し、いつも心の中では「お父ちゃん、働いてほしい」と願っていた。

5、立ち上がる父親（利男、中学2年のとき）

男手ひとつで、まがりなりにも我が子を育ててきた父親にしてみれば、なんとか利男をまっとうな人間にしたいというその思いは、人一倍強かった。利男が中学2年の5月初旬（1980年）、20万円の窃盗が明るみに出たとき、父は、「その悪い指を全部切り落としたる」といって、出刃包丁を持ち出し激しく叱った。いっしょに盗みをやったYの父親がとめに入るという一幕もあった。

母親の愛情を知らないで育った利男を不憫に思う気持ちと、ここまで育ててきた我が子の非行に走る姿に、どうしていいかわからないあせりや怒りを感じたのであろう。しかし、何とかしなければという必死の思いが自分のなかにありながらも、父親としての自らの生活をたてなおすことには、あまり積極的ではなかった。

思いあぐねた父親は、T市の姉（利男の伯母）に手紙を出す。「ひらがなばっかりの手紙やけど、いっしょうけんめい書きましてん」と父は言う。

5月中旬、T市の伯母来阪。父子が大阪駅まで出迎えに行き、その足で利男を児童相談所へ連れていって、担当官に相談している。

しかしこの父子の生活を見て、T市の伯母も父になにかと注意をした。父親がしゃんとした生活をしなければだめだということや、たとえ漬物ひときれだけでもいいから、親と子がいっしょに食事をする生活が大切だというようなことについて、かなり厳しく指摘されたようである。

利男の荒れていく原因が、小・中学校を通して教育を保障してこなかったことは勿論であるが、それと同時に、父親の生活のだらしなさやいい加減さが、大いに影響していると考えた学級担任や同和主担は、父親の生活を変えるために、かなり父親を追いつめるような話をしてきた。児童相談所へ利男を連れていった間違いも厳しく指摘してきた。

これら姉や教師からの指摘が父親の気持ちをゆさぶったのか、このころから父親の生活に変化が見え始めた。米を買ってきて父が飯を炊き、利男がおかずを買ってくるという生活が、毎日ではないが始まった。

いつ行っても何の変化もなかった炊事場に、なべや茶碗が置かれているのが見られるようになった。暗く沈黙していた家のなかに、生活の息吹きが少しずつ見えるようになってきた。

父の生活をたてなおしていくことにかかわって、仕事の件で解放会館（現在は住吉人権文化センター）に行くことを何度もすすめるが、父はきまって、「解放運動に参加しておったころはよう行きましたけど、ちかごろ支部の集会や行事に参加せんようになってからは、会館の敷居が高こうおまんね。」と言う。「どんなに敷居が高こうても、利男のために踏み台をしてでも、その高い敷居を越えなあかんのとちがうやろか。お父ちゃん、会館へ行こうや。」と、父親に言いつづける。

このようにして、仕事のこと、生活のことを中心に、いろんな話をくり返しながら、父親を少しずつ追いつめていく中で、「先生、わしなんとかがんばりますわ」と言いだした矢先、再び利男のゲーム機荒しと保育所への侵入の件が明らかになり、父親はまたしょぼくれて挫折してしまう。

6月5日、父親は再び児童相談所へ行き、我が子の面倒を見きれないということで相談を持ちかけて

いる。

この日の午後、児童相談所のA氏が来校。利男も同席させて彼の気持ちを聞き、今までのことについてもいろいろ話し合う。自分自身のこと、父のことなど利男と話す中で、利男の心のなかにある「父に働いてほしい」という願いがいっそうはっきりしてきた。利男にとって父の生活はどうにもやりきれなかったのだろう。一連の問題行動も、父に対する精一杯の抗議であったし、小遣いほしさの衝動でもあった。利男の立ち直りをはかるということを父と話し合って、児童相談所のA氏には帰ってもらった。

「保育所の鍵束を捨てた場所を言う」というので、利男といっしょにその場所へ行き、すでに雨でさびのまわった鍵束を植え込みの中で見つける。その鍵束を持って保育所へ行き、利男に謝罪させながら保育所の先生と話し合う。

「父に働いてほしい」という利男の気持ちを中心に、挫折しかかる父を励ましながら、解放同盟住吉支部も入れて話し合った結果、仕事のめどが少しずつ立ってくる。そんな話し合いの中で父は『たこ焼き』を始めるという。

仕事の資金のことなどもあって、6月16日父は利男を連れてT市に行く。翌日帰阪。この時点から『たこ焼き』の仕事が具体化し、父がその準備に動き出す。今まで見られなかった父の明るい表情が続くようになる。

T市の姉から借りた10万円で軽自動車のライトバンを中古で購入し、近所の木材店でもらってきた木の板を使って中を改造して、7月3日の夏の暑い日、南海本線住之江駅の高架下で屋台の『たこ焼き屋』を開店した。

6、利男のようす

学校では、1年生の頃は授業中友だちと私語をしたり、時には授業の邪魔をするようなこともあって、いろいろ問題を持っていた。2年生になってからは、クラス替えでわりあい仲の良かった友だちと離れたためか、授業中の私語はほとんどなくなった。しかし、授業には集中せず、ひたすら好きなマンガをノートに書くのが日課のようになっていた。したがって学力はかなり低かった。ただ、国語は他教科に比べてよいほうであった。しかし基礎学力が不足しており、そのうえ学習に対する目標も意欲もないため、ますます勉強がわからなくなっていった。

休み時間は、クラスの者といっしょにボール遊びなどはやっていたし、クラスの男子たちも、利男を特別視することはなかったが、特に親しくつき合う友だちはほとんどいなかった。利男も積極的につき合おうとはしていなかった。このように学校生活の中でも、どことなく無気力な部分が目立った。そんな利男の状況をどうするのかということで、教科担任や学級担任が何度も対策を話し合った。

ところが、6月中頃から（父が『たこ焼き』の仕事をするめどが立った時点）利男の様子に変化が見え始める。話しかけると簡単ではあるが対話が成り立つようになった。今まで見向きもしなかった解放学校にも来るようになった。解放学校の学習後、友だちとボール遊びなどをして、夜9時ごろまで児童館で楽しく遊ぶようになった。

家では、放課後や日曜日などは、父と『たこ焼き』の道具などを難波まで買いに行ったり、いろんな手伝いをするなかで、「たこ焼きだけでなく、わらび餅も売ったほうがよい」とか「土曜と日曜は、南港の釣り公園で店を出したほうがよく売れる」といったように、自分の意見もまじえて父との会話がなされるようになった。

最初の頃は、自分も学校から帰ったら手伝いに行くといっていたが、友だちに見られたら恥ずかしいといって、屋台の手伝いにはほとんど行かなかった。

学校から帰っても、父親のいない家の中でひとりテレビを見ている状況は以前と同じであったが、父親がどこにいるのか、いつ帰ってくるのかがわから

なかった過去の生活とはまったく違っていた。一人ではあっても、父親が今『たこ焼き』の屋台をやっているということがはっきりしていたし、月・水・金の夜7時からは、解放学校へ行くという日課が立っている。このことは、以前の利男の状況に比べて大きな変化であり進歩であった。

7、商売の不調と利男の車上盗

7月以降の父の『たこ焼き』が、10月になって車(軽自動車のバン)が故障し、仕事に出られなくなった。そこで早速知人から別の中古の軽自動車をゆずってもらい、その車の内部を改造している間に、別の若い男がその屋台の場所へやってきて、同じ『たこ焼き』をやり始めた。

父は、この若い男と場所のことで話をつけることに取り組んだ。その男はS町の方からやってきており、どうやら『親方』がついているらしい。しかし、何とか円満に解決しようと考えていた。『やり始めた仕事やさかい、なんとか続けたいんですわ』と、買い入れた『たこ焼き』の材料を見ながら父はため息をつく。

こんな状況の中で、11月に入って利男が再び車上盗をやった。(この件については後述する)それも、父が仕事をしているすぐ近くの路上であったため、父は商売がやりにくくなったという。利男に対して、「こんなつらい思いをするのも、みんなおまえのせいや」と愚痴る父であった。

車の故障と場所のトラブル。そんな中でまたまた利男の車上盗。そして12月に入って、こんどは警察から道路交通法にかかわってクレームがついた。「ちょっとのあいだ、ようすを見なしゃあないでんな」と、父は寂しく笑っていた。

今まで借りていたサラ金の返済に加え、生業資金毎月5万5百円は、生活保護の中からとうてい返せる見込みはない。その上、毎月返済はしていないが、知人からかりた金とT市の姉夫婦から借りた金などを合わせると、かなりの額になる。

殺風景な部屋の中で、父親と向き合って話していると、父親のあせりやいら立ちがじかに伝わってくるようでどうにもやりきれなかった。

「商売の不調」それは、利男父子の生活に直接ひびいてくるのはもちろんのことであるが、それにもまして、利男が立ち直っていく支えをくずしていくことになりはしないか。このような大きな問題なのである。

思いあぐねた父は、一時のつなぎのために、12月の半ば過ぎから『ルービックキューブ』を仕入れて、組み立てと販売の内職を始めた。粉浜で一日売って20個ほど売れるという。ストーブもなにもない寒々とした部屋の中で、組み立てたルービックキューブをビニール袋に入れて、リボンで結んでいる父親の姿の中に、重い生活をかかえ病気と闘いながら、必死で生き抜こうとするひとりの親の影があった。

一方、6月ごろからどうにか立ち直ったはずの利男であったが、2学期に入ってからは学校は遅刻も多くなり、解放学校にもほとんど来なくなった。そんな利男が、前述したように再び車上盗をやった。11月3日のことである。

午後5時半頃、住之江駅近くの路上で友だちとBと二人で駐車してある車のドアをこじあけ、中のバッグに手をつけた。現金1万円をポケットに、商品券は破り捨て、バッグは近くのモータープールに捨てた。

被害者のS氏から同和教育主担者のもとへ連絡が入り、すぐ対処したので現金の1万円と捨てたバッグは被害者の手元へ戻った。この件は、父親にしてもかなりのショックであった。

6月以降は、今までの盗みがすっかりなくなって、本人も明るくなり、ほっと安堵した父親にしてみれば、どん底につき落とされたような気持ちがしたのは、至極当然であった。家に行って、父と教師でかなりきびしく叱った。利男はお金がほしかったという。毎日の食費も含めて父からもらうお金では、ほしいものも買えないし、友だちとの付き合いもできない

という。

利男には、父親の苦しさや、家庭の経済状態が頭ではわかっていても、それをのりこえるために、歯をくいしばってがんばるという強さは、まだできていない。中学2年生の利男にしてみれば、無理からぬことかもしれない。二度とこんなことはしないと泣きながら利男は言う。反省の思いを込めて利男は頭を丸刈りにした。

挫折し、愚痴をくり返す父親を励ましながら、「お父ちゃん、利男を信じていこうや。突き放したらあかんで。」と教師は言うしかなかった。

「T市の姉夫婦が利男を引きとるとき、『自分たちの子どもにくれ』と何度も言った。あのとき、姉夫婦の子どもにしておいたほうが、利男にとっては幸せではなかっただろうか。しかし、自分のような親でも、利男を手ばなすことはできなかった。」と、こんな話を、父親は涙を浮かべながら熱っぽく語った。そして、「やっぱりあいつのことは、わしが面倒見ていきますわ。わしが死んでも、あいつが一人だちしよるようにしてやらんと、親爺の資格ありまへんわなあ。」と語る父親であった。

8、父の挫折

冬休みに入って父はいつものように利男をT市へ送り出した。せめて正月だけでも、明るい家庭の雰囲気の中で過ごさせてやりたい、という父の思いがあった。小学校1年生の利男を自分の手元に引き取ってからは、ずっとそうしてきた。利男をT市へ送り出した父の表情には、ほっとした安らぎと、父子で正月を迎えられない寂しさが、複雑にからみあっていた。

知人から、小さな置きごたつを一つもらって、その上でルービックキューブの組み立て内職をする父は、「そろそろブームも越えたのか、あんまりもうけになりまへんわ。」と寂しく笑う。「お父ちゃん、正月越せるんか?」というと、「正月は、わしひとりやよって、どうにか…」と答える父親。

ガラスは割れ、寒風がようしゃなく吹き込んでくる。その上に、支払いがとどこおっているため、ガスが止められていた。

出店の件で警察から呼び出しがこないか、利男のことで家裁から呼び出しがこないかと案じつづける父。そんなとき、いつも住宅前の路上に止めていた軽自動車が、駐車違反にかかった。反則金5千円はどう考えても痛かった。

屋台の場所の問題もどうにか解決したので、正月が明けて、1月半ばごろから父は再び住之江駅の高架下で、腰の痛みをおさえながら『たこ焼き』を始めた。ところが、一週間ほどでやめざるを得なくなった。「出店禁ず」の立て看板が出されたのである。南海電鉄・住吉警察・大阪府土木局の三者の連名であった。

ここまで追いつめられた父親は、もうどうしていいのか途方にくれた。2月に入ってルービックキューブはまったく売れなくなったし、材料も入らなくなった。100個組み立てて2500円の収入で、どうにか食いつないでいたのだが…。

このままでは利男父子はつぶれる。経済的に何とか打つ手はないものか。とにかくサラ金に迫われつづける父を、このまま放置しておいては立ち上がることは不可能である。もちろんサラ金に手を出したのは、自業自得であることも父は十分わかっている。しかし、そうせざるを得ない生活があったこともまた事実である。

解放同盟住吉支部と区役所の福祉も入れて対策をねった。その結果、何とか対策が打てる見通しがついて、その手続きをとったが、かなり手間どることがあって父の生活設計がすっかりくずれてしまった。「もうどうなってもよい」というなげやりな態度を父は見せ始めた。

「おとうちゃんがんばりや」という教師の言葉が、もう何のききめもないところまで利男父子は追い込まれてしまったのである。

9、またしても利男が…

こんな状況のとき、またしても利男の車上盗が明るみに出た。中学3年生の1学期である。5月31日・6月4日・6月7日の3回にわたって、南港釣り具店の駐車場の車6台から、現金・釣竿・リール・ジョギングパンツなどを盗ったのである。3回目のとき見張っていた店の人に見つかり、警察に通報されて捕まり取り調べを受けた。友だちとMと2人でやった事件である。教師も父もこれは大ショックだった。

学校でMの父親も入れて突っ込んだ話し合いをする。利男とMを警察から連れもどして指導しているとき、学校に来た利男の父は、利男の前に初めて手をついてわびた。「お父ちゃんが悪かったんや」と、顔中を涙でくしゃくしゃにして父は泣いた。そして、父が今まで歩いてきた被差別の道を、また、自分の生きざまを、利男の前で泣きながら語った。この父の話をじっと聞いていた利男も、「もうこんなことはせえへん、お父ちゃんかんにんして…」といって涙を流した。

今まで、叱られて泣いたことは何度もあったが、父親が何もかもかなぐり捨てて子どもにわびる姿には、利男も驚いたであろうし、そんななかで利男が泣いたのは始めてだった。自分も親も、被差別部落に生まれてきたことは十分知ってはいたが、被差別の道を歩んできた苦しい父の生きざまを、このとき利男は初めて知ったのである。

利男を連れて校門を出て行く親と子の後ろ姿を見ながら、どんなことがあっても、この父子をつぶさせてはならないと思った。

10、明るい見通し

1981年6月になって、生活建て直しのための資金の都合がようやくついた。早速父は、サラ金の返済にまわる。

夏のあいだは『たこ焼き』の売り上げも少ないし、火を使っての商売は父の身体にはあまりにもきつい。そこで父は、アイスクリームを仕入れて売り出した。土・日は住之江公園の釣り堀で商売を始めた。他の日は、売れそうな所をさがして歩く。

少しずつ商売のほうも見通しが立ってきた。父の顔に初めて明るい表情が見られるようになってきた。「お父ちゃん、どんなことがあっても、もう、サラ金にだけは手ェ出したらあかんで。」と父をたしなめる。「先生、もう絶対手ェ出さしまへん。こりごりですわ。」と父は言う。

生活苦の中でも、特にサラ金の返済からのがれたことは、何にもまして明るい見通しである。しかし、自業自得といってしまえばそれまでであるが、サラ金に手を出さなければ生きてゆけない生活があったのである。

今その生活が完全に変わったわけではない。苦しさは以前と少しも変わっていない。変わってはいないけれど、「親として我が子のためにがんばるんや」という決意がある。これで利男がシャンとしてくれれば、貧乏をしながらでも父には大きな生き甲斐が持てるだろう。

対策を打ったことで、今まで受けてきた生活保護は、8月から打ち切りになった。商売の見通し(『たこ焼き』という不安定な商売に見通しの立つはずはないが…)はまだ立たないけれど、父は「これでええんです。生活保護に甘えとったんでは、自分がシャンとしまへん。がんばります。」という。

こんな力強い父の言葉を、このときようやく聞くことができた。

そして利男は、1982年3月、公立高校に入学した。高校とたえず連絡をとりながら、利男の状況を追い続けてきた。高校に入学してからは何ひとつ問題はない。まだまだ生活状況は好転していないが、父子とも必死である。

時々自転車で走る利男と出会う。高校1年生の中頃住吉で利男と会って立ち話をした。「ええ顔して高校へ行きよる!!」としみじみ思った。

11、偏見の中で

必死の思いで我が子の姿を見つめ、自らも立ち上がって、よたよたしながら「たこ焼き」を始めた利男父子に対するまわりの住民の目は、きわめて冷たかった。

利男の行動を知っている人たちが、「あんな悪い息子は、警察へ突き出したらいいのに」とささやいていることを父親が耳にする。そんな周囲の意識に激しくいきどおりながら、父は、「いわれてもしゃあないけど…」と前おきして、「たこ焼きやってるわしに、『息子、あんなことさしといたらあかんで、お父ちゃんも頑張りや』というてほしかった」と嘆く。「部落のヤツやから…という眼で見られてんのは、ようわかるんですわ」と父はいう。

利男が中学2年の7月から父は商売を始めて、ようやく客もつき、少しずつ見通しが立ってきたなかで、息子に祈るような思いをかけて頑張るこの父親に、まわりの住民の温かい励ましがあってくれたら、「出店禁ず」の立て看板もおそらく立てられることはなかっただろう。「部落の人間やから、子どもも悪いんや」という周辺住民の偏見が、つぶれかかる父子に、容赦なく追い打ちをかけたのである。

利男をまっとうにさせるためには、父親をシャンとさせることだと考えて、このとりくみを進めてきた。親の生活実態が、子どもの生活を左右していく視点をきっちり見つめながら、この父と子に執拗にくいさがっていくことが、教育の極めて重要な課題であると信じてきた。

父と子を解放運動にきっちりつないでいくこと、利男を集団のなかでどうきたえていくかということ、とりわけ、「高校友の会」のなかで利男をきたえていくことは、今後に残された重要な課題であるということを、教師としての自分にいいきかせながら、このとりくみを進めてきた。

このとりくみからすでに20年あまりが経過する。2年前に父親と住吉の総合福祉センターで会った。「お父ちゃん久しぶりやなあ。利男は今どうしてるん。」と聞いた。「先生、利男なあ、いま、服屋ではたらいてまんね。住み込みやからほとんど家には帰ってきよらんけど、まじめにやってます。もう、歳も30こえよりましたわ。」という父の顔は、極めて晴ればれとしていた。

12、まとめにかえて

学力が身につかず、生活が苦しい状況におかれ、周囲の眼を気にしながら毎日学校に来ている子どもがいる。そして周囲の大人たちからは、子ども自身の努力不足・親の責任と思われて生きている姿がある。そんな子どもたちは、クラスの中で集団のすみに追いやられ、いつの間にか集団からはみ出していく。

「俺、勉強きらいや。せやから、高校に行きとうないね。それよりも、中学を卒業したら働いて、親に楽さしたるね。」という子どもの心の中に、ほとんどの友だちが高校に進学していく現実が重くのしかかっている。

「勉強がきらい」なのではない。「勉強がわからない」のである。必死になって教科書とにらめっこをし、教室で教師の話をどんなに聞いても、勉強の中身がさっぱりわからない。そこにきっちり手をさしのべてやらないから、勉強を放棄せざるを得ないのである。

小学校一年生に入学したときは、この子どもの顔は輝いていた。にこにこしながら先生の顔を見、先生の話を聞いていた。ところがあるとき、授業の中で「おやっ?」と思った。「なんで…?」と思った。その子どもの疑問に先生は答えてくれなかった。

答えてくれるどころか、「そんなことは自分で考えなさい」と言われた。そんな疑問をもつ子どもはどこか変わっていると思われたのかもしれない。そんなことにいちいち答えていたら授業が進まないと思わ

れたのかもしれない。とにかく適当にあしらわれた。

この子は先生がきらいになった。ふてくされて先生から叱られることが多くなり、勉強に興味をなくしていった。

学年がかわって担任がかわるたびに、この子はいつも期待をもった。しかしだめだった。そのままで中学校に入学した。もう期待など持てるはずがない。ますます勉強がわからなくなりきらいになった。そして、教師もきらいになった。こんな過程を歩んでくるなかで、「勉強きらいやね、働いて親に楽さしたるね。」と、むしろかっこよく開きなおって仕事につく子どもはまだしも、大多数の子どもたちは、その悩みや不安・いらだちを「荒れる」ことでしか表現できないのである。

そして、この荒れる子どもたちを尻目に、他の子どもたちの外面的な「真面目さ」と他人を蹴落してでものし上がる「努力」にのみ視点を当てて、教育の歯車は回り続けているのである。

「勉強がきらいやから高校に行かへん」と言う子どものひとことは、わからせないで放置してきた教育の責任に対する、厳しい告発であることに、教師も親も気がつかない。

こんな状況の中で、自分を誇示して生きねばならないところまで追い詰められた子どもは、荒れるより他に方法はなかった。こんな子どもの内面に深くくいこんで、差別に苦悩し呻吟する子どもたちの叫びを、確かな手応えでもって受け止めることが教育の営みなのである。

子どもの「荒れ」は、親の生活・意識そして教育の対処等々がからみ合って現出する。親の生活の崩れは、子どもの「荒れ」に直接ひびいてくる。この部分に教育は関与しなければならない。ところがたいていは、「親の生活にまでくいこむことは教育のわく外」として、一定の境界線を設けてきた実態があった。部落解放運動からの告発は、この教育の姿の変革を迫ったものであった。

しかし、多くの学校で、それは今もあまり変わったとはいえない。親がどんな生活をしているのか。家の経済状態はどうなのか。ということさへとらえられないままで終わっている教育の現実は、決して過去のことではない。

家庭が完全に崩壊して父親は家を出てしまい、母親が酒とパチンコに明け暮れる一人の子どもがいた。中学三年生である。学校から帰っても家には誰もいない。一人でインスタントラーメンを作って食べ、着のみ着のままふとんにもぐりこむ。夜中近くなって、酒に酔っぱらって、男の腕にすがりながら終電車で帰ってきた母親に、思いっきり罵声を浴びせて、入口のドアを内側から施錠して母親を中に入れない。ドアを間にして、子どもと親の激しいどなりあいが続く。あきらめて階段を下りていく母親の足音を確かめ、泣きながらふとんにもぐり込んだが、無性に腹がたって寝つかれず、家の中のものを蹴散らして夜の街へ飛び出していく。そして、明け方まで帰ってこない。

こんな形で荒れていく中学生の子どもが、それでも歯をくいしばって、時折、まっとうな姿にもどる。

「はじめに」の部分に記したように、「なんぼ突っぱっても、ツケはみんな俺にかえってきよる。先生、もう俺、突っぱんのやめるわ!!」と、こんないじらしいことを言って、何とか立ち直ろうとする。「あしたは遅刻せんと来るからな、せんせい!!」といって手を振りながら帰っていく子どもが、やっぱりその夜も、悲しさと憤りに負けて深夜の街をあてもなく歩き回り、ときには「カツアゲ」をし、シンナーを吸う。

また、こんな実態もある。

母親が蒸発してしまい、いつ掃除をしたのかわからないほど散らかした家の中で、パチンコから帰ってくる父親を待つ小学校二年生の子どもがいた。

夜おそく、酒の匂いをぷんぷんさせて帰ってくる父親は、子どもにとっては決してやさしい親ではなかった。母恋しさも手伝って、たえず家出をくり返す。そんなわが子を、「めんどう見きれんから、どっかの施設へあずけたい」といって溜息をつく父親。施設

にあずけて、この子どもが立ち直る保証はどこにもない。ただ、父親の子育ての面倒がなくなるだけである。

大人のいいかげんさのなかで、滅茶苦茶に心が破壊され、徹底した犠牲を強いられた子どもの実態が、教師の目の前にはあまりにも多い。

こんな子どもの姿をきっちり追いもとめ、親に迫ると同時に、こんな子どもを支える教師の連帯と、まわりの子ども集団を育てなければならない。

かつて、子どもの「荒れ」を出発点として、「なぜ子どもが荒れるのかわからない」と頭をかかえる教師から、「『荒れ』から告発されてきたものに心を馳せる」教師へと変革してきた過程があった。その中で、戦後の民主教育の欠落点をきっちりとらえ、同和教育・解放教育運動の確立をめざした教育改革の視点こそ、まさに差別に抗う視点であった。

現在、国際的に人権問題が叫ばれ、人権教育の取り組みはかなり広がりを見せてきた。このことは極めて大切なことであり、大きな進歩として評価することはできるだろう。しかし、この人権教育の取り組みの中で、部落問題や「障害」児問題・在日朝鮮人問題が希薄になってはいないかという部分を見つめなおさなければならない。

それと同時に、1983年に文部省通達として出された「公立の小・中学校における出席停止の措置について」というこの中身が今も生き続けており、「非行」にはしる子どもたちへの対処が、時には「出席停止」という処分であったり、警察権力への安易な移行であったりする実態は否めない。

こんな状況をもう一度見つめ直しながら、重い生活の中で苦悩する子どもの心をとらえる教育を創りあげなければならない。

そして、勉強ができる子とできない子。校則を守る子と守らない子。つまり、「良い子」と「悪い子」という選別が、教師の中だけでなく、まわりの子どもたちの意識にまで定着してきつつある教育の実態を排除しなければ、21世紀の人権教育は創造できないであろう。

※木下健二は大阪市立大学非常勤講師。